

間投助詞の一考察

チューシー・アサダーユット

0. はじめに

話し言葉では、時間の制約があり、相手と直接話し合うために、文を整理する時間が足りず、すぐ話したいことをその瞬間に言い出さなければならない。又、コミュニケーションがうまくはかれるかどうか相手の態度も見なければならない。これらの制約があるために、話し言葉には、終助詞や間投助詞やフィラーとして働く感動詞などが存在している。これらは、コミュニケーションの要素とも言えるだろう。

日本語教育には、文法を中心にテキストやコースをデザインする機会が多いため、間投助詞の教育がかなり少ない。間投助詞をうまく使えないと、コミュニケーションがうまくはかれない場合もあると著者は思う。これは柴原（2002）の OPI データを見ると分かる。

(1) *a9-09 本はね好きです。毎週ね 5冊ぐらい読みます。

*a9-13 先生はねどんなタイプな人が好きですか。

（柴原（2002）：p. 31）

間投助詞の中で、最近「ね」と「さ」がよく使われているが、どのような使い分けがあるか、ポライトネスの面より詳しく考察しようと思う。本研究は、間投助詞「ね」を中心に考察し、「さ」と比較して、又様々な使用の条件を把握する試みがある。

1. 先行研究

間投助詞を考察する先行研究は相当少ない。この中で、国立国語研究所(1951)、伊豆原(1993)、宇佐美（1999）の研究を取り上げて考察したい。

国立国語研究所（1951）では、間投助詞「ね」についてこのように述べている。

(2) 語勢を添える。または、単なる声のつながりのためにさしはさむ。

例：私ね、愛ということばが空の星みたいなきれいな事に思われて仕方がないのよ。

今朝ね、あんたにおわかれのつもりで、これかいたのよ

（国立国語研究所（1951）：p. 154）

又、間投助詞「さ」についてこのように述べている。

(3) 語勢を添える。（相手の注意を引きとめるようなニュアンス。）

例：それがさ、俺もつい先頃までそんな気がしてたんだよ。

だってさ、三重子ったら、おとうさんが帰ったら困るような顔するんだもの。

（国立国語研究所（1951）：p. 54）

国立国語研究所（1951）では、「ね」と「さ」の間投助詞以外に、「や」¹、「な」²も間投助詞であると示している。以上のように、国立国語研究所が言っている間投助詞の基本的な機能は「語勢を添える」である。

伊豆原（1993）は、「ね」も「よ」も間投用法（そこでは、語末・句末と呼ぶ）がある。「ね」の間投助詞は1つの種類に分けている。

(4) A-2型：語末・句末など、文の途中に用いられる「ね」で、話し手が聞き手の受けを確

認する形で話を進めている様子

例：回答者：……ところがね、ちょっといたずらの実験でね、水の中にちょっとね…
(後略)

(伊豆原 (1993) : p. 104)

(5)

類型	談話の進行方向	位置	コミュニケーション機能
A-1	話し手→聞き手	単独	持ちかけ
A-2	話し手→聞き手	語末・句末	持ちかけ
A-3	話し手→聞き手	文末	持ちかけ・共有化
B-1	話し手←聞き手	語末・文末	共有化
B-2	話し手←聞き手	文末	共有化、同意・確認
C-1	話し手→聞き手	単独	同意・確認
C-2	話し手→聞き手	文末	同意・確認

(伊豆原 (1993) : p. 106)

伊豆原が主張しているのは、間投助詞「ね」は「持ちかけ」、あるいは「引き込み」³というコミュニケーション機能を持っているということである。

次に、「よ」の間投助詞の例文を取り上げる。

(6) それでミヤザワさんよ、あんたがもうちょっとアメ車を買ってくれたらよ、誰もショーウィンドーにレンガ (保護主義) なんか投げ込まないように、オレが面倒みてやるからよ。(ブッシュ茶化すアメリカの漫画『アエラ』1992. 2. 4)

(伊豆原 (1993) : p. 108)

この間投助詞「よ」も「持ちかけ」という機能を持っている。これについて「聞き手の気持ちに関わりなく一方的に話を進めていくときの持ちかけであり、ぞんざいさ、押しの強さを感じられる」と付け加えた。間投助詞「ね」と「よ」は同じく「持ちかけ」(本研究の言葉で言えば、「情報を押し付ける」と言えよう)という機能を持っているが、どのように違いがあるか、伊豆原 (1993) では詳しく説明していない。

宇佐美 (1999) は Brown & Levinson のポライトネス理論によって「ね」の機能・用法を考察している。この中で、終助詞「ね」だけでなく、間投助詞「ね」も考察されている。宇佐美氏は英語の「You Know」の分析パターンを「ね」の分析に応用して、5つのコミュニケーションの機能⁴に分類した。その中に、間投助詞「ね」は2つの機能があると示す。

(7) 注意喚起 (Attention-getting)

例：ほんとうに速読する人はね、岩波新書はね、2時間で読まなきゃいけないだよね。

発話埋め合わせ (Verbal-filler)

例：えー、にゅ、入稿はですね、2回ぐらいに分けたいとゆうふうに思っております。

(宇佐美 (1999) : p. 248-253 の例文を引用した)

宇佐美氏の思考は、コミュニケーションから見たものなので、文型より具体的な用法の観点から機能を決めている。

以上で、本研究に関わる主な先行研究を述べた。国立国語研究所(1951)は形式からの観点で考

察し、一方、伊豆原（1993）と宇佐美（1999）はコミュニケーションの観点から考察するという違いがある。そして、伊豆原（1993）で述べた「持ちかけ」と宇佐美（1999）の「注意喚起」がかなり近いが、伊豆原は情報量に基づいて考察するが、宇佐美氏はコミュニケーションの具体的な用法に基づいて考察しているということが分かる。それに、宇佐美は、伊豆原（1993）にない「発話埋め合わせ」という間投助詞らしい機能を取り上げた。

本研究は宇佐美（1999）と同じように用法からの観点で間投助詞を考察する。伊豆原（1993）では間投助詞「よ」も存在していると述べたが、本研究はよく扱われる間投助詞「ね」を中心として進めていきたい。又、よく扱われる間投助詞「さ」とも比較してみる。

更に、本稿の仮説は、間投助詞、あるいは間投用法終助詞は、終助詞と関連して、終助詞の本質的な機能を持っていると考えているので、終助詞「ね」と「さ」についての機能を次の項目で別途説明する。

2. 間投助詞の機能・用法

「間投」という言葉は、間に投げると直訳できる。これは、具体的に言うと、発話する時に、文になっていないうちに、間ができる時、その空間を埋め込んで滑らかな表現にするために何か単語をつけるという意味であろう。又、今日の研究では、「フィラー」という言葉に似ている。これについて、「あのね」、「えーと」、「なんか」という単語、又「そうーですねー」という表現も間投用法があると言われる。一体「間投」はどこまでの範囲があるかという疑問の答えはまだ明らかになっていない。

本研究は句節末（前項の伊豆原（1993）の「句末」と相当する）の「ね」と「さ」を「間投助詞「ね」と「間投助詞「さ」と呼ぶが、この「間投助詞」はただ句節末に置いて、文を滑らかにすることでなく、何か聞き手に対して態度を要求したりすると見なす。

2.1. 「ね」の機能・用法

まず終助詞「ね」の文法を参照すると、神尾（1990）や益岡（1991）や伊豆原（1993）や金水（1993）などによると、「ね」の本質的な機能は「同一化」「情報一致」「共有化」ということである。これらの単語は、「ね」を使うと、話し手の情報が多いか少ないかということに関係なく、結果的に、話し手と聞き手の不平等な情報量は同じ量、同じものになるということを示すものである。著者は、「同一化」や「一致する」段階までは話し手は力で聞き手に一方的に情報を押し付けることではなく、聞き手に情報を受け取って統一するように依頼する機能を持っているのではないかと思う。言い換えれば、「ね」は、同一化が完成するまで話し手は聞き手に情報を押し付けるように強制することではなく、聞き手に情報を統一してもらうように依頼する機能を持っているのではないかと著者は思う。

情報量の理論によれば、「ね」が発生している文を、話し手の情報の方が聞き手の情報より多い文、話し手の情報は聞き手の情報に相当する文と、聞き手の情報の方が話し手の情報より多い文の3種類に分けられる。もちろん句節末にある間投助詞「ね」の場合は、話し手の情報の方が聞き手の情報より多い文にグループ化している。なぜなら、句節の内容を発言する前に、聞き手は次に話し手がどの言葉が出すのか分からないのである。

「ね」を句節末につけると、聞き手にその句節の内容に対して注意を求めることになる。

- (8) 54A でも、あ、例えば、その、卒業する時にね、
 55B はい
 56A えー、なんか、提出、あ、大学院の入学手続きをしなければいけなかったんですよ。

[大学サービス]

- (9) (雫は猫に話す)
 雫 : 私だって前はずーっと素直で、優しい子だったのに。本を読んでもね、この頃、前みたいにワクワクしないんだ。

[耳を済ませば]

- (10) ママさん : ねえ皆、この子達ね、文化祭でシンクロやるんですって。

[ウォーター]

- (11) (天沢の叔父さんの友達は雫をほめる)
 叔父1 : 聖司君にこんなかわいい友達がいたとはねえ、
 雫 : ええっ、聖司? <天沢に向いて>
 あなた、もしかして天沢聖司?

[耳を済ませば]

(8)、(9)、(10) は間投助詞「ね」を使うが、句節のレベルが違う。(8)と(9)では従属節と主節の間に、間投助詞「ね」が付く。(10)では、主語の句節末に間投助詞「ね」が付く。又、(11)のように、発話が終わっていないが、間投助詞「ね」をつけると、相手がターンを取ってしまうこともある。この場合、雫はターンを叔父1から取って自分が発言したいことを言い続けている。

これらの間投助詞を使用する意図は、聞き手に句節にある内容について注目を求めることであり、これを本研究では「注目要求」と名づけておく。この「注目要求」は宇佐美(1999)の「注意喚起」と同じ機能である。

次、終助詞「ね」からもう一つの機能は「自己確認」という機能である。田窪・金水(1997)、金水(1998)などの談話管理理論の研究では、この「ね」の種類を「再計算中」と呼ぶ。

- (12) A: 今おいくつですか。
 B: ○20歳です。
 ×20歳ですね。
 ○ええと、45、いや、もう46歳ですね。

(作例)

金水(1998)は、数が多ければ多いほど計算する時間がかかるために、計算過程を表す言語形式は「ね」であるとしている。だから、「ええと」という、考えている最中を表す言葉とよく共起することが可能である。この類の「ね」は、話し手の頭の中で何回も伝える内容を繰り返して考える(自分の内部知識と確認する)と解釈しても良い。この「ね」は独話に使う「な」に近い。一方、間投助詞「ね」も「計算中」として使うことも可能である。これは宇佐美(1999)の「発話埋め合わせ」あるいは「間投」に近い。

しかし、発話を埋め合わせるということは結果的な機能であると著者は思う。この場合の間投助詞「ね」の基本的な機能は「計算中」を表すのである。よって、これを「計算中表示」と名づける。

- (13) 3582 これはね、え、これもあの、配ってないけれども一、え一とね、点検場所がね、ケーツー（K2）の自工課第3工具研磨係、え一、K2、工場技術課エネルギー班。

[男性]

以上で、間投助詞「ね」の機能について述べた。次に、間投助詞「ね」の表現効果的な機能について述べておきたいと思う。表現効果的な機能は、本質的な機能と違って、ある目標のために使用する機能ではなく、使用すると自動的に発生する間接的な機能のことである。

まず「注目要求」の表現効果的な機能は次のようである。

1) 内容強調

文の中で、一番大切な部分は主語と述語であろう。述語の対象や、場、時間についての修飾節は文によって順番に大切さが減っていく。しかし、その部分に間投助詞「ね」をつけると、「注目を要求する」部分になるので、情報的な大切さを持つようになる。例えば、

- (14) 光洋君は勉強をあまりしたくないって言ったらしいよ。

強調内容	補足内容
------	------

- (14') 光洋君ね、勉強をね、あまりしたくないって言ったらしいよ。

強調内容	強調内容	補足内容
------	------	------

(14')のように、「ね」を付け加えることによって文を句節に区切ると、それぞれの句節の大切さがまるでジグソーパズルのようなようになる。ジグソーパズルはその断片だけでは全体図の中でどのような位置を占めるのかはわからない。よって、組み合わせが完成するまで、1つ1つの断片は等しい大切さを持つということが出来るだろう。言わば、文が簡潔しないうち、聞き手は句節にある内容がどれぐらいの大切さを持っているのかということが分からないから、その句節により一層の注目を示すようになる。その結果として「ね」が付与されている句節が情報的な大切さを持つようになると考えられる。

2) ターン交代の印

実際のコミュニケーションでは、聞き手は話し手の文が終わるまで待つて、その文に対して答えるのではなく、話し手の発言する内容が大体分かったら、(11)のように、話し手の発言する句節についている間投助詞「ね」の後に自らが話し手となって話を始める。「ね」がついていない場合とついてある場合とを比べると、間投助詞「ね」がついている場合の方が、聞き手にとって発話権を取りやすいので自分の立場を聞き手から話し手に変えやすいであろう。

「計算中表示」の場合、「発話埋め合わせ」という表現効果的な機能が起こる。つまり、発言内容のつなぎとして働き、発話全体は滑らかになるのである。

以上、間投助詞「ね」を考察した。間投助詞「ね」についての機能をまとめ、次の表の通りである。

(15) 表1「間投助詞「ね」の機能」

	本質的な機能	例	表現効果的な機能
間投助詞「ね」	注目要求	ねえ皆、この子達ね、文化祭でシンクロやるんですって。	内容強調
			ターン交代の印
	計算中表示	これはねー、え、これもあの一、配ってないけれどもー（後略）	発話埋め合わせ

本研究はイントネーションを明確に考察しないが、「計算中表示」として働く間投助詞「ね」は長音化されることが目立っている。又、上昇イントネーションの間投助詞「ね」は「注目要求」として働く場合が多いようである。

2.2. 「さ」の機能・用法

終助詞「さ」について記述している先行研究は、上野（1972）、陳（1987）、野田（2002）である。

上野（1972）では、「さ」は「デス・マス」体の文には用いられない。又、叙述文（述べ立て文）に頻繁に使われる。問いかけ文と使う場合もあるが、限られているというように具体的に考察している。しかし、意味や機能を考察していない。

陳（1987）では、「さ」は話し手が確認、確信していることを、聞き手に対する説明としてのべる文につける終助詞である、又、半分以上の「さ」は、先手発言として「さ」をつかうことができない、つまり先手発言に反応する文に使う、と述べている。この点は「よ」と異なると主張している。

- (16) 「さ」は話し手が当然だと考えることをつたえる文に使われる。(中略)「アイテガシラナイカラオシエテヤロウ」という気持で発言するならば「よ」が選択されるのであって、「さ」は選択されない。この場合、「さ」はこたえではあるが、単なる答えなのではなくて、あいての発言に対する説明として発言されているのだと思われる。

(陳（1987）：p.101)

野田（2002）では、「さ」は、話し手が責任をもって断定せず、当然のこととして、あるいはとりあえずのこととして提示することを表す、と述べている。

間投助詞「さ」も終助詞「さ」と同じように、発言している内容が当然な話であることを示す。又、「よ」と同じように、一方的に内容を聞き手に押し付けるニュアンスもある。この「聞き手に内容を押し付ける」は、間投助詞「ね」のように、「注目要求」の機能を持っていると解釈できる。しかし、「さ」の強い押し付けによると、聞き手への態度は「要求」という気持ちではなく、「強制」となる。よって、本稿では、間投助詞「ね」と対立して、「注目強制」と名づけておきたい。

- (17) 友達：ねえ、夕子はその人の名前知ってんでしょ。教えなよ。

雫：夕子！

夕子：それがとっさのことでさ、「マ」がついてただけど、マサキだっけ、アマ・・・

ねえ、雫。

雫：さあね。

事務：でもさ、話を最後まで聞かずに飛び出してくるなんて月島らしいね。

友達：知りたいけど知りたくないのよね。

[耳を済ませば]

(18) 3807A: きょうさ一、きょうなんかニュースでやってたらさ一、なんか、ベンチにも入ってなかった。

3808M: あ、そーなんすか。

[男性]

(17)では、は並立文の間についている間投助詞「さ」と接続詞の後ろについている間投助詞「さ」を示す。これらの位置はもちろん間投助詞「ね」も使える。(18)では、主語の句節末についている例と従属節の後ろについている例である。

間投助詞「さ」は、間投助詞「ね」と違って、「計算中表示」という機能を持っていない。「さ」を使うと、話し手は何か伝えたい、言わば押し付けたい情報があるという態度を表す。テストとして、計算を表す「ええと」と共起させると、「ええとさ一」という「計算中」のようにならない。⁵

表現効果的な機能について、間投助詞「さ」は間投助詞「ね」と同じように、「内容強調」と「ターン交代の印」の機能を持っている。計算する機能を持っていないために、「発話埋め合わせ」がないと解釈する。

以上で、間投助詞「さ」を考察し、以下の表のような分析結果が得られた。

(19) 表2「間投助詞「さ」の機能」

	本質的な機能	例	表現効果的な機能
間投助詞「さ」	注目強制	きょう <u>さ</u> 一、きょうなんかニュースでやってたら <u>さ</u> 一、なんか、ベンチにも入ってなかった。	内容強調
			ターン交代の印

間投助詞「ね」と「さ」を考察した結果、終助詞である本質的な機能が間投助詞にも残っているという仮説からみると、間投助詞「ね」と「さ」の使用は以下のように異なる。

- 1) 聞き手に「注目」をさせたい時に、「ね」を使えば聞き手に要求することになり、「さ」を使えば聞き手に強制することになる。
- 2) 「注目」をさせる時に、その間投助詞は自動的に句節の内容を強調したり、聞き手のためにターン交代の印になったりするのである。
- 3) 計算をしている時に、間投助詞を使おうと思ったら、「ね」しか使えず、「さ」は使えない。
- 4) 「計算中」を表す時に、間投助詞「ね」は自動的に発話を埋め合わせる。

3. 間投助詞の周辺

3.1. 間投助詞の機能から終助詞の機能へ

以上で述べたように、間投助詞「ね」は終助詞「ね」と密接な関係があり、同じ概念を持っている。間投助詞「ね」は「情報一致」から「注目要求」という具体的な機能に派生するようになっている。一方、談話の中で、間投助詞のように、扱われる終助詞もある。つまり、「注目要求」として働く終助詞「ね」もある。これは確かに、話し手の情報量の方が聞き手の情報量より多い場合、即ち叙述文（述べ立て文）⁶と働きかけ文の場合である。問いかけ文の場合、聞き手の情

報量は当然話し手の情報量より多いために、「注目要求」より「確認要求」や「同意・同感要求」の方が強いのではないかと思う。このような終助詞はよく講演会などの独話によく見られる。これは、談話の量が多ければ多いほど、「注目要求」として働く間投助詞は、「注目要求」として働く終助詞に展開する傾向が多くなるとも言えよう。

- (20) 59A : で、僕はその時海外旅行に行く予定があったんですね。
60B : はえ
61A : ということを、前もって教務課に相談しに行ったら//結構柔軟に対応してくれたんで
62B : はえ
あつ
63B : そう//なんですか。

[大学サービス]

(20)は、Aは自分の大学の事務サービスについての経験を話し、Bは聞き手として聞いていて、よく知らないことがあったら聞くことになる。だから、Aの発話量は非常に多い。この場合、59発話目にある「ですね」は間投助詞「ね」から派生された「注目要求」として働く「ね」である。

それに、言い終わらない文に表れる間投助詞「ね」「さ」も終助詞「ね」「さ」に展開することも言える。これらの助詞は終助詞と解釈されても、間投助詞としての機能がなくなる。

例えば、

- (21) 同輩 : でもな、圭介。お前まだ若いんだからさ、ゼロから頑張れ……な
圭介 : (ひたむきに) 今まで何回もゼロからやってきたんだけどね。
同輩 : (考えていて) ……ハッとするよな借金も、がんばれば一、片付くね。

[のど自慢]

- (22) 雫 : あれも全部作ったの？
天沢 : まさか、ここでバイオリン作りの教室もやってるからさ、
雫 : でも、あなたのもあるんでしょう。

[耳を済ませば]

3.2. 間投助詞と丁寧さの共起の制限

前項で述べたように、「ね」の基本的な機能は「情報一致の依頼」があるために、丁寧さと共起しやすいだろう。一方、終助詞「よ」や「さ」の場合なら、話し手が、聞き手がその情報が必要か要らないかということを見捨て聞き手に情報を強く押し付けるものなので、丁寧さと共起することが難しいであろう。この条件は間投助詞の場合にも影響を与える。

間投助詞「ね」は「注目要求」や「計算中表示」という機能を持ちながら、丁寧さと共起することが可能である。一方、間投助詞「さ」は「注目強制」という機能を持っているために、丁寧さと反発するので、丁寧さと共起することができない。

- (23) 54A : でも、あ、例えば、その、卒業する時にね、
55B : はい
56A : えー、なんか、提出、あ、大学院の入学手続きをしなければいけなかったんですよ。

[大学サービス] ((8)と同じ)

(23') ○54A でも、あ、例えば、その、卒業する時にですね、

(23'') ○54A でも、あ、例えば、その、卒業する時にさ、

(23''') ×54A でも、あ、例えば、その、卒業する時にですさ、

「さ」は「強制」のような意味を持っているために、表現的には、くだけた表現と見なされるのである。従って、改まり度が高い場面では、間投助詞「さ」を使ってはならないことになる。

又、「ね」と句節の内容が不適当な場合もある。基本的には、句節の内容は意味を持っている単語や名詞句などだが、感動詞、接続詞などの文法カテゴリである場合もある。例えば、「つまり」→「つまりですね」、「あの一」→「あのね」、「ええと」→「ええとですね」などである。文法カテゴリと共起する場合、その文法カテゴリが「くだけた」という性質を持っている場合、「ね」を「ですね」に変えることは不適切である。

例えば、「なんか」

(24) ○なんかね、今日は人が込んでるね。

(作例)

(24') ?なんかですね、今日は人が込んでますね。

これは、文法カテゴリと共起する終助詞「ね」も同じである。

(25) 「なるほどね」→? 「なるほどですね」

「まあね」→? 「まあですね」

以上で、間投助詞と丁寧さの共起について考察した。制限は次の表の通りである。

(26) 表3「間投助詞と丁寧さの共起の制限」

間投助詞	句節の内容				
	意味を持っている単語・名詞句	文法カテゴリ			
		「砕けた」性質		「丁寧」性質	
		普通体	丁寧体	普通体	丁寧体
「ね」	○ (例:俺は <u>ね</u> 、)	○ (例:なんか <u>ね</u> 、)	? (例:なんか <u>ですね</u> 、)	○ (例:ええと <u>ね</u> 、)	○ (例:ええと <u>ですね</u> 、)
「さ」	○ (例:俺は <u>さ</u> 、)	○ (例:なんか <u>さ</u> 、)	×	○ (例:ええと <u>さ</u> 、)	×

○=共起できる ×=共起できない ?=不適切

4. おわりに

間投助詞「ね」と「さ」の機能が明確になっている。又、間投助詞から終助詞へ展開することや丁寧さと共起する制限なども考察して、以上のような結果が得られた。これで、間投助詞「ね」と「さ」の違いが分かり、間投助詞の本質的な機能と表現効果の機能も明らかになった。だが、これから、教育でどのように指導するのか、どのような練習をすればいいのか、又日本語教育の面についても考えなければならない。「はじめに」で取り上げた柴原(2002)のようなテスト資料も参考になると著者も思っているが、調査対象の人数を増やし、実際の間投助詞の使用についての調査を行うべきだと思う。

本研究では、間投助詞の機能や間投助詞と他の文法カテゴリの関連について考察したが、考察していない間投助詞の研究がまだある。例えば、句節がたくさんある文では、どこから間投助詞を入れ始めたらいいか—主題の句節か、従属節の句節か。間投助詞を全ての句節末に付けたら、おかしくなってしまう原因は何か。どの場合にたくさん間投助詞をつけるべきか、どの場合に間投助詞をつけない方がいいか—などの疑問に答える研究はまだ必要だと思う。今後の課題としたい。

注

¹ 「や」は古い言い方なので、本研究では対象外とする。

² 間投助詞「な」は終助詞「な」と同じように男性専用である。又、国立国語研究所では、言い聞かせるようなニュアンスがあると示している。本研究では、「な」は「ね」の変異形の一つにするために、「な」を「ね」の一部として考察する。しかし、「な」と「ね」の違いもある。男性は「な」を使用する時に、聞き手に自分の伝える内容を「ね」より押し付けたい気持ちを持っていると言われる。忠告や説教する時に、「ね」より「な」がよく使われるだろう。又、方言差もある。

³ 伊豆原（1994）では、「持ちかけ」を「引き込み」に変えている。

伊豆原英子（1994）「感動詞・間投助詞・終助詞「ね・ねえ」のイントネーション—談話進行との関わりから—」『日本語教育』83、p. 96-107、日本語教育学会

⁴ 5つのコミュニケーション機能は、会話促進 (Facilitating)、注意喚起 (Attention-getting)、発話緩和 (Softening)、発話内容確認 (Confirming)、発話埋め合わせ (Verbal-filler) である。本研究では、間投助詞「ね」の機能を中心にするために、間投助詞「ね」が働かない3つの機能を本稿中に書いていないが、ここに参考として示しておく。

会話促進 例：飛行機に酔う人ってあんまりいないよね。

発話緩和 例：この英語が全部揃ってくるまで、えーと、そちらにはお渡しできないんですね。

発話内容確認 例：えーと、じゃあ、いちよちょっと、説明した方がいいですよね。

⁵ 「ええとさ」は「注目強制」として扱うことが出来る。一方、「ええとね」は「注目要求」も「計算中表示」もどちらとしても機能する。

⁶ 本稿で使っている「叙述文」は、仁田（1991）の「述べて文」と「表出文」という意味である。（仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房）

例文の出展

[ウォーター] = 矢口史靖（2001）「ウォーターボーイズ」『シナリオ』10、p. 36-66

[大学サービス] = 著者「大学の事務サービス」談話資料、別紙①

[男性] = 現代日本語研究会編（2002）「自然談話テキストデータ CD-ROM」『男性のこことば・職場編』ひつじ書房

[のど自慢] = 安倍照男・井筒和幸（1999）「のど自慢」『シナリオ』2、p. 124-167

[耳を済ませば] = 宮崎駿（1995）『耳を済ませば』スタジオジブリ DVD

参考文献

伊豆原英子（1993）「「ね」と「よ」再考—「ね」と「よ」のコミュニケーション機能の考察から—」『日本語教育』80、p. 103-114、日本語教育学会

上野田鶴子（1972）「終助詞とその周辺」『日本語教育』17、p. 62-77、日本語教育学会

宇佐美まゆみ（1999）「「ね」のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」現代日

-
- 本語研究会編『女性のことば・職場編』、p. 241-268、ひつじ書房
- 神尾昭雄（1990）『情報のなわ張り理論』大修館書店
- 金水敏（1993）「終助詞ヨ・ネ」『月刊言語』22-4、p. 118-121、大修館書店
- 金水敏（1998）「談話管理理論に基づく「よ」「ね」「よね」の研究」堂下修司他編『音声による人間と機械の対話』、p. 257-271、オーム社
- 国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』秀英出版
- 柴原智代（2002）「「ね」の習得—2000/2001 長期研修 OPI データの分析—」『日本語国際センター紀要』12、p. 19-34、国際交流基金日本語国際センター
- 田窪行則・金水敏（1997）「複数の心的要素による談話管理」『認知科学』3-3、p. 59-74
- 陳常好（1987）「終助詞—話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞—」『日本語学』6-10、p. 93-109、明治書院
- 野田春美（2002）「終助詞の機能」宮崎和人他編『モダリティ』、p. 261-288、くろしお出版
- 益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版